

立川

8

立川と語ろう 立川に生きよう
August 2007
écoutez bien Vol.26 No.273



立川バンク! 時速 60kmで
傾斜(カント)を垂直に走りきる!



写真: 五来孝平

こ こ が タ チ カ ワ !
こ こ も 立 川 ! ①

立川競輪場 (高松町)



緑あふれるエントランス。葉と葉がすれあう隙間から、太陽の光がきらきらこぼれる。渡る風はすがすがしい。入場料は50円。コインゲートに向かう。自動改札に50円玉を入れるシステムだ。競輪開催中は立川駅北口から無料バスが運行している。バスに乗らなくても、徒歩で15分。歩くにはちょうどいい距離だ。

立川バンクはレムニスケート曲線と呼ばれる急なコーナカーブが特徴。1周400m、傾斜角度はセンターで31°13'06"にもなる。こういうバンクでは選手は内に外に振られるというが、実際近くで見ていると、打鐘(ジャン)が鳴った後カントの高い位置から直線へ走り込んでくる迫力シーンは立川ならではの!と思ってしまう。競輪はやっぱり場内で見るといい。ライブ放送もしているが、なによりも音がいい。選手の息づかい、車輪の音、聞けば胸が高鳴ってくる。直線が長いのでゴール前の展開がまたおもしろい。

レースとレースの合間には、売店でおいしいものをいただく。ラーメン、手打ちうどん、もつ煮込み。定番のおにぎりにきゅうりの浅漬けを1本。フライのソースは一度漬け。おなかはいっぱいなのに、なぜかまた売店の前に立ってしまう。

今年12月30日、KEIRINグランプリ07が開催される。選考期間を競り上がって参加する選手は9名。賞金1億円が賭かった勝負に、競輪場はいつもと雰囲気ガラリと変わる。真の一発勝負は、競輪がよくわからなくても面白いに違いない。



食べる、歩く、寝る。究極のシンプルさです



「250km 砂漠レース」日本事務局代表 藤崎 保江さん

■藤崎 保江(ふじさき やすえ) / 世界各地の砂漠を自給自足で踏破するレースに出場。サハラ砂漠、中国のゴビ砂漠、南米チリのアタカマ砂漠など十数回の経験を持つ。レースを主催する「レーシング・ザ・ブラネット」(本部・香港) 日本事務局代表もつとめる。レースカメラマンである夫・将士さんと一番町に住む。

■芳賀 敏博(はが としひろ) / えくてびあん編集長

於：一番町ご自宅で 写真：中村 伸

芳賀 7日間かけて砂漠を踏破するレースに何度も出場している女性がいらっしゃるって聞いて、何となく真っ黒に日焼けして全身が鋼のように研ぎすまされた超人のような方、という先入観を持っていました。お会いしてみたら、大変失礼ですけど、ふつうの方なので、ちょっと意外でした。
藤崎 ふつうですよ(笑)。身体能力はふつう以下かもしれません。
芳賀 そういう方が、どうして砂漠レースに?
藤崎 もう12年以上前になりますが、雑誌のグラビアで偶然、砂漠の中をザックを背負った日本人女性が走っている写真を見たんです。一目で心を奪われました。記事を読むと7日間砂漠を走る自

給自足のレースだと。即座に自分もやってみようと思ったんです。主催者に問い合わせたら誰でも出られるというので、その場で申し込んでしまいました。
芳賀 それがきっかけですか? それまで何かされていた、とかではないんですか?
藤崎 ランニングは少し。それもダイエット目的で、走ることが好きだったわけじゃないんです。フルマラソンも3回経験しましたが、飽きたというか、最初完走した感動が薄れてきたんですね。雑誌に載っていた方は当時トリアスロンで日本の第一人者だったんですが交通事故で再起不能と言われるほどの怪我をされた。その女性が「世界一過酷なマラソン」とされていたレースで自ら再起を

賭けるんだ—そういう気迫が写真から伝わってきました。砂と空と、あとは自分だけ。これだ!と。
芳賀 思い立って、本当に砂漠を踏破してしまうというのがすごい。
藤崎 いざエントリーしたら、他の参加者はその世界では錚々たる方ばかりだったんです。装備ひとつとっても私は小学校の遠足みたいにあれもこれも詰め込んで、皆さんは洗練された最小限の荷物。成田で、もう帰ろうかなと(笑)。でも何とか歩き通せたんですね。そのレースは今私が参加しているのとは別でサハラ砂漠でもモロッコで行われるレースだったんですけど、ルールは同じで砂漠の中の250kmのコースを7日間で踏破し合計タイムが記録になります。トップクラスの選手は装備を最小限にしてスピードを競いますが、私たちは歩くんです。特別なトレーニングなしで初めて出場した人でもゴールはできます。何度かレースをしてつかんだコツは、無理して走らず、歩く。そして歩いている間はできるだけ止まらない。止まると気持ちが萎えてしまうし、体をまた動かすのにものすごくエネルギーを使いますから。
芳賀 砂漠の中で道に迷ったり、危険はないんですか?
藤崎 毎朝その日のコースの地図が配られますが、ただ広い砂漠ですから紙にミミズのような線が引かれているだけ。コースに100mおきくらいに立てられたピンクの旗が目印で、これも風で吹き飛ばされたり倒れて見えないことがあるんです。私は先に行った人の足跡をたどるようにしていますが、けっこう迷いますね。旗のあるところまで戻ったり後から来る人を待ったりして大事には至りませんが、砂嵐の時なんかは大変です。最後尾の選手に現地スタッフがラクダで

伴走しているので、最悪でも何とかありますが……。
芳賀 水や食料は?
藤崎 水は命にかかわりますから朝の出発時と途中15kmくらいおきにあるチェックポイントで支給され、キャンプ地に着くと食事用のお湯もあります。そういう最低限の支援はあっても、7日分の食料や装備はすべて自分で背負うルールです。ゴミを捨てるのも厳禁です。私は荷物が多めで40ℓのザックですが標準は30ℓ、トップを狙うような選手たちは20ℓくらいで本当に最小限の荷物ですね。
芳賀 7日で250kmですから1日30~40kmですね。実際の苛酷さは想像もつかないんですが、よくぞ女性が…とってしまう。
藤崎 私が参加した中でいちばん暑かったのはセ氏58度ですが、平均でも50度。まわりを見ても砂とか岩ばかりで日影とか逃げ場がないんです。私も何回かレースを経験して砂漠をナメかかったとき、砂漠の厳しさの洗礼を受けてリタイアしてしまいました。でも女性の方が強い面もあるんです。男の人は「男のロマン」というのかしら、夕方キャンプ地に着いて夕陽に感動して涙を流して、翌朝あっさりリタイアしたりするんです。女の人は泣いている男性を尻目に、明日のために黙々とラーメンをすすっている(笑)。とにかく目的地に着くんだと、あきらめない。ドクターからもうレースを止めなさいと言われても泣いて続けたいと訴えます。私が日本の窓口になっている「レーシング・ザ・ブラネット」も代表はマリーさんという素敵なお美人の女性なんです。
芳賀 「男のロマン」が案外脆いのは認めますが(笑)、藤崎さんのように何度も砂漠に

らっしゃるのは「女のロマン」だな。
藤崎 レース中に歩きながら考えることと云ったら、「帰りたい」「冷たいビールが飲みたい」といったことばかりなんです。そのうち頭がボーッと何も考えられなくなります。本能のままに足を動かしているんですね。生活も朝起きたら食事して、歩く。夕方キャンプ地に着いたら食べて、寝る。その繰り返し。食べる、歩く、寝る。究極のシンプルさですよ。風景も砂と空だけ。その中の自分もく無>……終わってみると、それがたまたま素晴らしい体験だったと思えるんですね。ああいう場所にいると日本のゴチャゴチャした感じが嫌になります。やっぱりロマンを追いかけたいですね。
芳賀 今年もサハラ、ゴビ、チリのアタカマ砂漠とレースがあるそうですが……。
藤崎 実は今、妊娠しています…12月に出産予定なんです。主人がゴビ砂漠に撮影に行きましたが私は留守番。私は砂漠で産むのもいいな、と思ったんですけど周りがみんな反対するので(笑)あきらめました。子どもが産まれたらどうなるか、まだ分からないんですが、いずれ立川からチームを組んでレースに参加したいですね。アタカマ砂漠なんかは標高約4000mで50年以上一滴も雨が降ったことがないんです。月の世界みたいですよ。一緒に行きませんか?



ゴビ砂漠を歩く藤崎さん(写真：藤崎将士さん)

- りそな銀行 立川支店 柴崎町3-6-29-1F 522-4161
- オリオン書房 アレア店 柴崎町3-6-29-3F 521-2211
- ほっとすべーす 中屋 柴崎町3-6-30 522-2932
- サンカメラ 柴崎町3-7-22 522-3336
- Coffee Shop LARGO 柴崎町3-7-22-2F 525-6704
- パッケージプラザ カサイ 柴崎町3-8-7 522-8601
- けやき出版 柴崎町3-9-6 525-9909
- 手打ちぎょうざ工房 柴崎町3-11-25 522-4770
- こむろ酒店 柴崎町3-14-3 522-2613
- 喫茶 ギャラリー花 柴崎町3-14-6-1F 524-3668
- 矢沢歯科眼科 柴崎町3-16-2 525-6600
- 手作りケーキラ・フリーズシュクレ 柴崎町3-17-25 525-3513
- 株式会社京王ストア 立川店 柴崎町3-18-10 540-1131
- 武本測量株式会社 柴崎町5-17-2 524-5503
- サーフショップ Waioli 柴崎町5-17-14 522-7331
- ジャガー立川 柴崎町6-15-23 524-5859
- NPO法人 東京賢治の学校 柴崎町6-20-37 523-7112
- 株式会社 浅見酒店 富士見町1-2-7 522-2823
- 伊藤接骨院 富士見町1-4-29 524-7861
- ディサービスセンター Aso 富士見町1-4-29 524-7231

えくてびあんの輪
立川と語ろう 立川に生きよう
えくてびあんは
リストのお店にいつもあります

- 今月は 柴崎町・富士見町のお店です。
- 井尾クリニック 富士見町1-4-29 540-3299
 - スーパー 肉のハナマサ 富士見町1-18-10 548-2970
 - 手作りケーキの店 プティパニエ 富士見町1-22-30 529-8364
 - 西立川児童会館 富士見町1-23-6 525-0571
 - さえき 西立食品館 富士見町1-23-13 529-5333
 - (株)ヤマダ電機 富士見町1-24-9 526-1099
 - 株式会社 ダイクマ 立川店 富士見町1-24-9 526-1046
 - 井上レディスクリニック 富士見町1-26-9 529-0111
 - 中華レストラン 東華園 富士見町1-27-10 529-0458
 - 榎本調剤薬局 富士見町1-31-18 526-2322
 - フルーツ&ベジタブル 三登屋 富士見町1-32-17 522-3021
 - 有料老人ホーム サンピナス立川 富士見町1-33-3 527-8866
 - 飯塚花店 富士見町1-33-5 522-5684
 - 一如社グループ エスパス21 富士見町2-1-9 527-0370
 - うさぎ専門店 ラッキーラビット 富士見町2-11-7 524-6054
 - 一級建築士事務所 株式会社 ホーミー 富士見町2-12-3 522-2220
 - カフェ・貸しホール ばくだん畑 富士見町2-12-3-2F 522-2214
 - Caf'e Cuisson 富士見町2-12-7 090-6935-1227
 - 家庭料理の店 つくし 富士見町2-12-10 526-6016
 - 有限会社 白洋舎 富士見町2-24-16 522-5952

筑波山

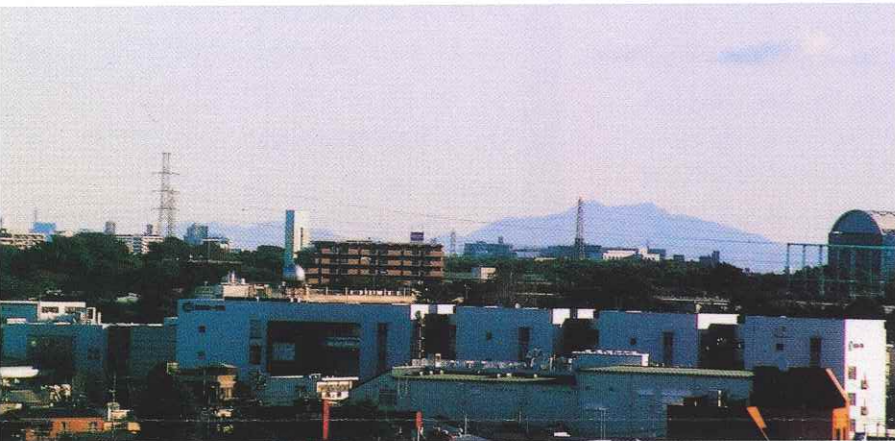
877m

案内人: 守屋龍男
写真: 中村 伸

「日本百名山」ガマの油売り発祥の山に登る

[筑波山へのコース]

車の場合: 立川=3時間=筑波山神社→30分→つつじ分岐→30分→白蛇石→30分→
弁慶茶屋跡→40分→女体山→40分→男体山→10分→ケーブル山頂駅=6分=下駅・筑波山神社
電車などの場合: 立川=50分=秋葉原=つくばエクスプレス45分=つくば=バス40分=筑波山神社



高松町から見える筑波山 (読者提供)

立川から筑波山が見えると何人もの人から聞いた。高層マンションやモノレール駅から、北東の方向に見えるという。筆者もモノレール駅や昭和記念公園のコスモスの丘に何度も通って探したが、残念ながら見たことがない。今年は特に暖冬で大気が霽ることが多かったせいかもしれない。

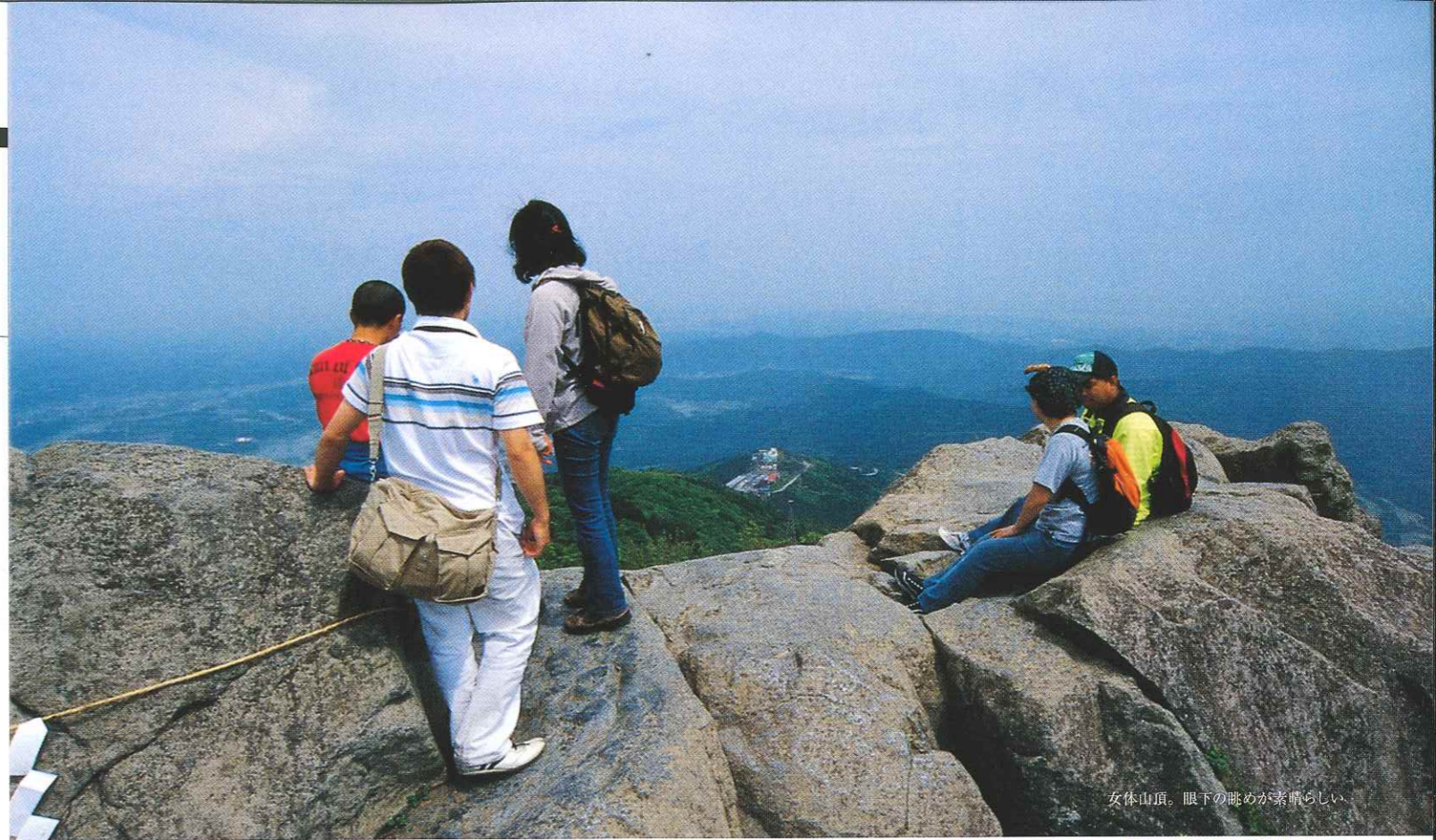
今回のシリーズを終えるにあたり、見るのはなかなか困難ではあるが筑波山を省くわけにいかない。何といっても「日本百名山」の一つで古くから全国的に知られた山である。5月中旬、いつものメンバーで行った。車を筑波山神社脇の市営駐車場に停めて登山道に向かう。神社の周りは土産店がずらりと並び、ガマの油の職がどの店にも立てられている。店員が「ガマ蛙を捕まえてきたら買い取るよ」と声をかけてきた。さすがに、ガマの油売り発祥の地だけのことはある。

鬱蒼とした杉木立の中の階段道を登る。いきなりの急登で汗がすぐに吹き出てきた。途中で100人ほどの消防学校の生徒たちに追い抜かれた。体格の良い元気な若者たちの集団だ。先生らしき人が最後尾で青息吐息の形相で登ってくる。

ようやく尾根筋の弁慶茶屋跡に着く。クリンソウやタニウツギの紅色の花が深い緑の中に浮かぶように咲いている。足元には立川では見られなくなったオドリコソウも咲いている。下りてきた人からこの先の登山道が小学生の団体で混雑していると聞き、我々は少し早い昼食をとる。肉を焼いていたら登山者が何人も「おいしそうね」と声を掛けていった。

道も空いたようなので出発することにする。「弁慶の七戻り」という大きな洞穴を通り、いわくありげな名前が付いた幾つかの岩場の急登を経て神社(女体山御本殿)に着く。すぐ先の岩山が二つある山頂のうちの一つの女体山で、一等三角点も設置してある。眼下には茨城の水田地帯や霞ヶ浦がまるで海のように広がり、素晴らしい景観である。

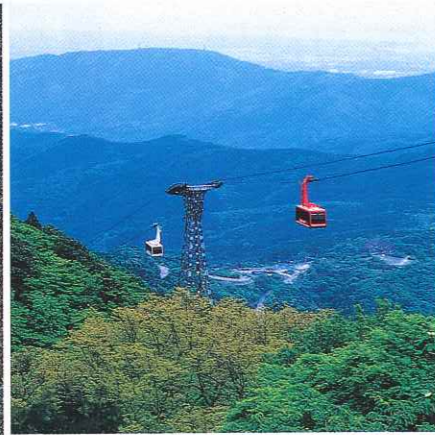
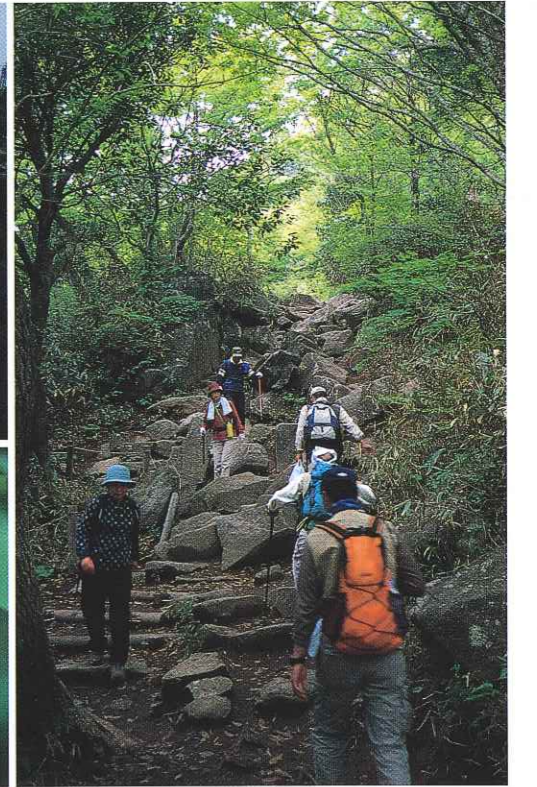
せっかく遠路はるばる来たので、もう一つの山頂、男体山(標高が5mほど低い)にも登り、ケーブルカーで下山した。



女体山頂、眼下の眺めが素晴らしい



女体山から男体山方向を望む。田植えを終えた関東平野が広がる



途中で出会った消防学校生たち



オドリコソウ



アオタモの花



女体山の本殿



男体山の気象観測所跡

立川と多摩地域が
もっと楽しいホームページ

多摩てはこ
ネット

http://www.tamatebako-net.ne.jp/

多摩てはこネット編集工房
〒190-0012 立川市曙町3-4-3 武蔵ビル2F
tel 042-548-9606 fax 042-548-9609
e-mail message@tamatebako-net.ne.jp

常楽我浄

真如苑提供番組くじょうらがじょう

スカパーフックTV 216ch、マイテレビ 84ch

土 曜 午前9時～9時15分
午後7時15分～7時30分
再放送/火曜 午前9時～9時15分
午後7時45分～8時
放送時間は予告なく変更する場合がございます。

立川に育てられて七十二年

真如苑

柴崎町1-2-13 Tel. 527-0111(代)

雑誌・書籍・地図・政府刊行物・教科書・文房具・事務機

オリオン書房

■ルミネ店
(立川ルミネ7F).....TEL 042-527-2311

■ノルデ店
(パークアベニュー 3F).....TEL 042-522-1231

■サザン店
(グランデュオ下サザン2F).....TEL 042-525-3111

■アレア店
(アレアア2・3F).....TEL 042-521-2211

■立川北口店
(第一デパート3F).....TEL 042-523-3311

http://www.orionshobo.com

大廣社は今、「知的集約」型企業を実践しています。

伝達を使命とする情報産業の「翼を担う大廣社は、新しい時代の新しい表現を責任を持って拓くために、クリエイティブから最終製品にいたるまでの一貫体制を構築しています。

先進のシステムと最新技術との融合



株式会社 大廣社
〒190-0022 東京都立川市曙町5-17-13
tel. 042-527-1911
fax 042-527-1949
E-mail info@daikousya.jp
http://www.daikousya.jp/index.html

えくてびあん流

身の丈で考える「いのち」の重さ

映画「かんからさんしん」を観る

62年前の8月15日「終戦の日」まで続いた戦争。8月は戦争の犠牲を思い平和を祈る催しが重なるが、4月4日の立川空襲をはじめ戦争は多くの悲劇を生んだ。6月、立川市女性総合センター「アイム」ホールで、立川親と子のよい映画をみる会主催でアニメ映画「かんからさんしん」を観た。



三線(さんしん)と沖縄の歌の演奏も行われた

上映があったのは沖縄戦が事実上終了し「沖縄慰霊の日」となっている6月23日。米軍との地上戦で将兵だけでなく「集団自決」で多くの女性、子どもまでが犠牲になった沖縄でく生きることを選んだ子どもたちを描いたアニメ映画。

印象的だったのは、洞窟の中で命じられるままに手榴弾を爆発させようとする大人たちに、幼い少女が泣いて死にたくないを訴え、老人が「童神ということもある。もう少し待とう」と思い留ませるシーン。むずかしい理屈などではない。親しい人をいたわり、思いやる心が命を支える一子どもや老人の視点からの「いのち」の訴えは、戦争ばかりでなく、今の世相にそのまま通じるものがある。

この人この店 ④9

CAFE SOMMEILLER

長谷川 尊子さん

「看板メニューはブレヤッサです」とおっしゃるのでいただきました。エスニックではない、イタリアンでもない。カレーのようでカレーでない。「アフリカの料理です」。はあ～、なるほど。だから食べたことのない味なんですね!「元フランス領で食べられる料理です。ニンニクと大量のレモン汁がポイント」とおっしゃるように、レモン汁効果で油を使った料理なのにとってもあっさり。ご飯によく合う味です。レアチーズケーキは酸味のあるクリームと一緒に口の中へ。とろけて混じり合う瞬間がいいですね。お客様が自分の部屋にいるようなくつろぎがコンセプトの店作り。インテリアの勉強をしてきたオーナー・長谷川さんのデザインです。時代を少し遡ったような空間に、口数の少ない独特な雰囲気の長谷川さん。立川にはあまりないカフェっぽいカフェです。場所は錦町、南武線からよく見えるサーモンピンクのビル2階。



〒190-0022
立川市錦町1-5-6 サンパークビル205
TEL 042-527-1440
営業時間 11:00～21:00
定休日 月曜と第3金曜日



写真撮影:五来孝平



挿画:綾 幸子

道路に面した、わが家の庭ともいえない狭いスペースに、頂きもののランの鉢や草花を植えたプランターが並んでいる。朝、それに水をやるのが私の日課になっている。

「お早う」「お早うございます」と、いろいろな人が挨拶をして行く。ペコリと頭を下げる人、歩を緩めて腰をかかめてお辞儀をする人、上品なお辞儀、そっけなく見えるお辞儀。ただのお辞儀に人柄まで見えてくるから不思議だ。

私は昭和の初めの生まれ。小学生になって習ったお辞儀は両踵をつけ、背筋を伸ばし、胸を張り、両手の中指をズボンの縫い目に置く、顔を前にまっすぐに向けるというものだった。この姿勢から上体を45度まで前に倒す。さらに敬意を表するときは上体をさらに深く倒していく。両手の中指の位置は、ズボンの縫い目より離れてお尻の方に行く。いわゆる、お尻を抱える格好だ。成人し社会人になっても、この姿が最高のお辞儀とっていたが、考えてみれば滑稽な姿である。

30年ほど前、子どもにマナーを教えたいということから古式の礼法を学び始めた。立つ、座るといった日常の動作から冠婚葬祭にいたるまで、常識として知らなければならぬことがたくさんあった。例えば立ち姿は、背筋を伸ばし、腕は自然に下ろす。両手の位置はズボンの縫い目より前になる。この姿を自然体という。自然体の上体を前に倒していけば立ったお辞儀、立礼になる。

古式礼法には、座礼に九品礼といって九種類のお辞儀があるが、現代では立礼、

座礼とも上、中、下の三通りに簡略化していいと思う。上を真礼、中を行礼、下を草礼と呼ぶ。立ち姿の真礼のお辞儀は、自然体から上体をゆっくりと前に倒し、手は両膝頭に向かって下げ膝頭のところで止める。60度くらいの深いお辞儀になる。女性は両膝頭の中央で両手を重ねる。立ち姿の行礼のお辞儀は、同様に上体を倒し、自然体のときの手の位置と膝頭の中間まで来たときに止める。45度から50度くらいのお辞儀になる。草礼のお辞儀は、体格にもよるが、手が自然体のときの位置から膝頭に向かって5センチくらい下がったところで止める。30度くらいの軽いお辞儀になる。

お辞儀の速さとタイミングは、一礼三息と残心といって、二呼吸である。息を吸いながら屈体し、止まったところで息を吐き、体を起こして息を吸う、胸いっぱいその息を吐いて残心、礼終わると、呼吸を合わせて行く。

その他、ふだんは用いないが、深い深いお辞儀の最敬礼がある。直角に近く前傾し手は膝頭を覆う。神仏を拝むお辞儀である。

お辞儀は、私たち日本人が大切にできた礼の表現。生活様式が変わっても、美しいお辞儀を交わしたいと思う。

中野豪清(なかの・たけきよ) ■昭和2年昭島市生まれ。昭和24年抑留されたソ連より帰国。電機学校卒業後、会社員を経て昭和39年に新日本文化学院を引き継ぐ。地域の青少年育成などにもあたりながら、昭和55年設立した全日本作法教育振興会理事長として現代作法の普及につとめる。錦町在住。

立川のお作法

中野 豪清

第1回

お辞儀

表紙の人

園部由貴さん(錦町)

JR中央線の線路近く。知る人ぞ知る、こだわりの店が多く入るパステルピンクに塗られたビル。その2階で2004年から開いている「器とテーブル周りの雑貨」店オーナーがこの人。店名「H.Works」のHは、Hand=手仕事への思い。手作りの作家ものの陶器、ガラス、金属、木製品……季節ごとに企画展で取り上げるどの一品も、手許に置いて使ってみたくなる。作家と作品への確かな目配りだけでなく、園部さんご自身の優しさまで感じさせるのである。

錦町「H.Works」で

写真:細江英公

かたこと

まずお詫びから。7月号VIEW写真キャプションで「昭和用水(富士見町/新青梅街道沿い)」とありましたが「新奥多摩街道沿い」の間違いでした。お詫びして訂正いたします▼本号がお手元に届く頃、子どもたちは夏休みの真っ最中。編集子の子ども時代は宿題も忘れて遊び惚けていましたが、今どきの子どもたちはどうなのでしょう? まずは暑中お見舞い申し上げます▼えくてびあんも本8月号で発行24年目に入りました。これもご愛読、応援いただいた立川の皆様のおかげと深く感謝申し上げます▼新しい連載企画もスタートしました。表紙裏の「輝きのメルヘン」、第1頁の「ここがタチカワ! ここも立川!」、本欄左の「立川のお作法」。いずれもよろしくご愛読くださいませ▼それだけでなく暑い時期。地球温暖化で気候が大変動するかもしれないと言われます▼対談は炎熱の砂漠を自分の足だけを頼りに踏破する砂漠レースをなさる藤崎保江さん。文明の対極にある荒々しい自然の中だから見えるものがあります▼VIEWは先月号で連載の終わった「続・立川から見える山」特別編。自分の足で一歩一歩登る山歩きも、人と自然との関わりを身近に感じさせてくれるはず。 (芳)

スタッフ

編集 大久保清志/清水恵美子/中薫子
デザイン 池田隆男(WATER DESIGN ASSOCIATES)
AMNET design factory

写真 五来孝平/中村 伸

えくてびあん (C) 8月号

第26巻 通巻273号
平成19年8月1日発行
発行 えくてびあん編集工房
〒190-0012
東京都立川市曙町2-17-5 杉田ビル3F
TEL 042-528-0082 FAX 042-528-0065
編集人 芳賀敏博
発行人 加賀悦也
印刷 (株)大廣社

無断転載を禁じます。

バルーン

大空に高く高く上っていくバルーン。ひとつひとつに人が乗り、ひとりひとりに人生がある。きらめく太陽の中、人生を乗せたバルーンはいったいどこへ行くのだろうか。

輝きのメルヘン

ともやす
ジュエリーコレクションから

1

天空

写真：五来孝平



友安真智恵 (ともやす・まちえ)

立川市柴崎町出身。ジュエリーデザイナー。東京芸術大学美術学部工芸科同大学院にて鍍金を学ぶ。夫・友安昭氏とともに1972年「アトリエ A&M ともやす」を設立。昭氏が蜜蝋を使って作り出すパーツ原型をデザインし、貴石をはめこんで、オリジナルティ溢れるジュエリーを作り出す。

雲

形のない雲に形をあげる。黄金色の形をあげる。雨粒が落ちてきた。草原に降る雨。砂漠に降る雨。とんがった雨、丸い雨。木々を洗い、白い地面を湿らせ、乾いた心を潤した。

